

數十間被附、夫れより以來は西側門前・東側門前とて、兩側に門前家有之處、貞享四年六月廿一日之洪水、元祿九年十月十一日之出水に、東側川端門前崩落、家數九軒退轉仕、其後連々崩込、門前之往來も止り候處、享保十八年四月廿八日夜千日町雨寶院より出火にて、野町類焼之砌、往來殊之外混雜仕、諸人迷惑仕に付、坂口切通し、當寺別院慈眼院屋敷並に門前家下まで切出し、寺町往來に被仰付、步數七拾二步四尺三寸御用地に指上、爲替地享保十九年六月十二日石坂町一向宗瑞泉寺本屋敷上ゲ地之内、七拾二步四尺三寸拜領、門前地に被仰付、于今門前家三軒相立居候。とあり。右由來書に據れば、貞享四年・元祿九年の洪水以來連々川崩にて、元祿十三年より往來の通行止みたりしを、享保十八年の火災に付き、更に坂路を取廣め、今の如く道路を付けられたる事知られけり。此の坂路は、野田寺町・泉野寺町等の要路にて、實に犀川口にて野町口の本通りに劣らぬ道路といふべし。

○蛤坂新道

此の新道なる地は、從前犀川の河原なりしを、慶應元年七

月蛤坂の麓より河上吹屋坂まで堤防を以て河原を築出し、蛤坂の中程に新に道路を付け、是より往來をなましむ。故に蛤坂新道と呼びて、追々家屋を建てたり。依つて明治三年七月町名を立て、蛤坂新町と可稱旨、藩廳市政局より布達すといへども、今に至り蛤坂新道と稱す。但し蛤坂新町の名は廢藩後廢して、蛤坂新道を本稱となしたり。

○蛤坂町

從前は妙慶寺門前と稱し、蛤坂の上妙慶寺の邊は同寺の門前地にて、天明六年の由來書に、元和元年開基檀那松平伯耆守自身指圖にて、川端に門前家數十軒被附、夫れより以來西側門前・東側門前とて、兩側に門前家有之、と記載す。然るに慶應元年新道出來の頃、蛤坂東側なる河縁をも築出し、坂下より家屋を建て、兩側共連櫓して門前家と連續せし故、明治廢藩置縣の後、門前地の名義を廢し、町名を蛤坂町となしたり。

○安養山妙慶寺

淨土宗也。寺記に云ふ。當時開基後醍醐天皇第八宮佛眼上人明心法親王、南陽之湯逗難遁旨聞食、北國下向給、越中

國射水郡牧野村有縁之地滞在被爲在。文和二年之頃伽藍建立、安養山極樂寺、號、則禁裏御内堂場勅定有之、越中一國中玄米一升宛家數上納米被命。其役向之寺守山二ヶ寺・富山二ヶ寺、都合四ヶ寺共、同開山に而建立、寺號も四ヶ寺共極樂寺与號し、山號は其の地名を名乘。開山遷化は嘉慶元年三月廿一日。其頃は牧野村に寺有之由、天正十三年富山佐々成政と合戦之頃、前田利家卿本陣を被据。其節藩士松平久兵衛菩提所に致度旨、現住寂蓮社城譽上人へ被申入處、爲敵兵伽藍堂塔兵火に罹る。依つて金澤へ隨從し來り、松平氏下屋敷に居住し、安養山極樂寺と稱し來る處、元和元年松平伯耆の亡母妙慶大姉の爲牌所・寺建立致し度旨、奥村因幡を以言上せられ、則寺内並門前共都合敷地步數千六百步拜領被命、一寺建立、寺號を妙慶寺と改稱す。とありて、野田寺町の極樂寺と同開基にて、其の由來も極樂寺と全く同じ。開祖佛眼上人明心法親王の傳説等は極樂寺の條に詳記す。

○妙慶尼之傳

妙慶尼は松平伯耆の母にて、その牌所として妙慶寺を建立

す。松平譜を按ずるに、妙慶尼は三河國の士丹羽勝左衛門の娘也。同國伊保の城主松平紀伊守乗信に嫁し、二男二女を生む。乗信何地の合戦の時なりけん戦死せり。其の子治右衛門・久兵衛とて兄弟兩人、二女を同道し金澤に來り、長如庵方に便り暫く居たり。治右衛門・久兵衛兩人共に前田家へ奉仕し、久兵衛は後伯耆康定と稱し、采地一萬石を賜はりたり。母妙慶尼は慶長十六年三月五日病を以て歿し、今當寺境内に墳墓を築きけり。また伯耆康定が墳墓も同境内にありて、墓驗の槻木、巨大の老木といへども甚だ繁生して、其の前に大なる五輪石を建てたり。過去帳に、慶長十六年三月五日一樂院殿崇譽妙慶大姉、三州丹羽勝左衛門娘、松平伯耆母儀。とあり。伯耆康定の歿せしは、元和六年四月九日とあり。

○妙慶寺傳話

當時に天狗の筆跡とて、大小の二字を書きたる扁額あり。古來火防の守りといひ傳へたり。寺院創立以來火難を遁れ于今存在するも、此の扁額あるゆゑなりといへり。故に今此の模寫をば、火防の守りとして乞ひ行く人多しとぞ。又當